

(第二時限…八〇分)

二〇二五年度 ⑧

国語問題

(全25ページ)

注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 二、解答はすべて別紙の解答用紙に記入しなさい。
- 三、解答はすべてマークセンス方式です。マークに際しては、マークした部分を機械が直接読み取って採点するので、左記の注意事項を読み、間違いのないようにしなさい。

1、マークする時は、HBの黒鉛筆(シャープペンシルはHBの0.5ミリ以上の芯)を使用すること。					
2、解答用紙は折り曲げたり、汚したりしないよう注意すること。					
3、だ円は次のように完全に黒くぬりつぶすこと。 (ぬりつぶしがつい場合は、解答が正しく読み取れないことがあります。)					
(1) 解答がひとつの場合(例えば③と解答したい場合) <table border="1"><tr><td>①</td><td>②</td><td>③</td><td>④</td><td>⑤</td></tr></table>	①	②	③	④	⑤
①	②	③	④	⑤	
(2) 解答がふたつの場合(例えば③と⑤と解答したい場合) <table border="1"><tr><td>①</td><td>②</td><td>③</td><td>④</td><td>⑤</td></tr></table>	①	②	③	④	⑤
①	②	③	④	⑤	
4、マークする場合の悪い例(次のようなマークは正解と判定されません。)					
<table border="1"><tr><td>①</td><td>②</td><td>③</td><td>④</td><td>⑤</td></tr></table> ○で囲む	①	②	③	④	⑤
①	②	③	④	⑤	
<table border="1"><tr><td>①</td><td>②</td><td>③</td><td>④</td><td>⑤</td></tr></table> ✓印をつける	①	②	③	④	⑤
①	②	③	④	⑤	
<table border="1"><tr><td>①</td><td>②</td><td>③</td><td>④</td><td>⑤</td></tr></table> 線を引く	①	②	③	④	⑤
①	②	③	④	⑤	
<table border="1"><tr><td>①</td><td>②</td><td>③</td><td>④</td><td>⑤</td></tr></table> ぬりつぶしが不完全	①	②	③	④	⑤
①	②	③	④	⑤	
5、一度マークした解答を訂正する場合は、消しゴムで完全に消してからマークし直すこと。 ×印をつけても消したことになります。					
<table border="1"><tr><td>①</td><td>②</td><td>③</td><td>④</td><td>⑤</td></tr></table>	①	②	③	④	⑤
①	②	③	④	⑤	

四、試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

— 次の文章を読んで、問いに答えよ。

〈悪の凡庸さ〉とは一般に、ごく平凡な人間が職務の遂行を通じて巨大な悪の加担者になってしまう事態を指すものと理解されている。一九六一年のアイヒマン裁判を傍聴したハンナ・アーレントが裁判報告『エルサレムのアイヒマン』のなかで提起したこの概念は、彼女自身の説明の曖昧さも手伝って、ユダヤ人大量殺戮^{きつりく}Ⅱホロコーストの主導者の一人であるアドルフ・アイヒマンを職務に忠実なだけの〈凡庸な役人〉、上からの命令を伝達する「歯車」と見るような偏ったイメージで

A

にいたっている。

まず最初に確認しておきたいのは、彼女が〈悪の凡庸さ〉という言葉でアイヒマンの罪を軽視したわけでも、(a)ホロコーストの非道さを^①カン過したわけでもないことである。〈悪の凡庸さ〉という表現にはアイヒマンの「悪」を「凡庸」なものと片づけたと誤解されかねない面があり、実際にそのことが^⑦多くの人びとの反発を招いたのだが、裁判報告のなかでホロコーストを「巨大な前代未聞の犯罪」と呼び、「あの時代の最大の犯罪者の一人」であるアイヒマンへの死刑判決を支持している点からして、アーレントにこの男を免罪しようという意図がなかったことは明白である。彼女は (b)、アイヒマンのような「凡庸」な役人が史上類を見ない犯罪に加担した事実を問題にしたのであって、ここで検討する必要があるのはほかでもなく、彼がいかなる意味で「凡庸」と言えるのか、そうした見方がはたして妥当なのかという点である。

アイヒマンが一般に考えられるような「冷酷非情な怪物」でも、大量殺戮に快楽を覚える「倒錯したサディスト」でもないという意味でなら、彼を「凡庸」と呼ぶことに異議を唱える者はいないだろう。アーレントの指摘はその点では広く受け入れられており、これに示唆を受けて行われたミルグラム実験によって心理学的にも裏づけられている。(c)このユダヤ人移送局長官が上から与えられた任務を肅々と遂行する〈凡庸な役人〉にすぎなかったかのような印象を与える彼女の説明^④に対しては、ホロコースト研究者の評価は一樣に厳しい。「最終解決」の立案・遂行におけるアイヒマンの主導的役割は多くの研究によって裏づけられており、彼が法規や命令を^②ジュン守するだけの杓子定規な官僚ではなかったことも明らかにしているからである。

この男はウィーンのユダヤ人移住本部に勤務していた時期から、前例を打破してめざましい成果を上げるクリエイティブな組織

者として名を馳せていた。彼は戦時中もベルリンの国家保安本部でデスクワークだけをしていたわけではなく、東欧各地の殺戮現場へと頻りに出張し、特別行動部隊による銃殺や絶滅収容所でのガス殺までも実見していたのだった。

アーレントの裁判報告を読むと、彼女がアイヒマンの「凡庸さ」を「完全な思考欠如」——自分がいったい何をしているのか、その行為がどんな結果をもたらすのかについての思考と想像力がまったく欠けていること——に見出しているらしいことがわかるが、この点についてもホロコースト研究者の見方は否定的である。多数の文書や証言から、アイヒマンは自分が何をしているかを明確に理解していたばかりか、それをドイツ民族にとって正当なこと、ユダヤ人移送の責任者たる自らに課せられた歴史的使命とまで考えて実行していたことが明らかになっている。

アイヒマンが他の官僚たちと同様、出世のためという「凡庸」な動機から「悪」に加担したという意味で〈悪の凡庸さ〉の概念を理解すれば、アーレントはこれによって無数のアイヒマンたちの犯罪、(d)〈行政的犯罪〉の普遍性を問題にしようとしたのだと言うことができるかもしれない。彼女がアイヒマンの「悪」に「普遍的性質の諸問題」を見出していたこと、(e)それを普遍性の名のもとに免罪しようとしていなかったことは事実である。だがそれでもこうした見方は、ホロコースト研究者の目には絶滅政策におけるアイヒマンの主導的役割を軽視し、彼を突き動かした反ユダヤ主義イデオロギーの重要性をカン過したものに映ってしまう。ホロコーストが無数の官僚たちによる〈行政的犯罪〉であることは間違いないとしても、アイヒマン個人の罪をその「普遍的性質」に還元するのは歴史研究の立場からは当を失したものとかわざるをえないのである。

④ アーレントとホロコースト研究者の間の見解の対立は、究極的にはアイヒマンが発揮した創造的なイニシアティブをどう捉えるべきか、その際にイデオロギーが果たした役割をどう見るかという点にあると言えるだろう。

こうしたアーレントとホロコースト研究者の見解の対立は、法則定立的な政治学と個性記述的な歴史学の基本的方向性の違いを反映している面がある。これは一九七〇年代以降のナチズム研究を規定してきた原理的対立、つまりホロコーストの決定要因をナチ体制内部の権力構造に見る「B」と、それをヒトラーらナチ党指導部の世界観やイデオロギーに見る「C」の対立とも関連している。ヒルバークは行政機構の政策決定過程を重視する点で基本的に「機能派」の立場を先取りしており、

〈行政的犯罪〉がいつどこでも生じうるといふ意味での普遍性を認めてもいるのだが、他方でホロコーストをそうした犯罪の「特殊例」とみなし、アイヒマンの役割を「D」に還元することを慎重に避けている。その点からすると、彼は〈行政的犯罪〉の普遍性と特殊性の双方を強調する中間的な立場をとっていると言える。ここで考える必要があるのは、アイヒマンの主導的役割やその歴史的個性、主観的意図やイデオロギーの重要性を無視することなく、〈行政的犯罪〉の何をどこまでできるのかという問題である。

ヒルバーク以降のホロコースト研究の進展を踏まえると、この点を見極めるためには普遍性を偏重する〈悪の凡庸さ〉の概念とは別の角度から〈行政的犯罪〉の問題を考察する必要があると考えられる。この問題をめぐる近年の議論において注目されているのは、^①「机上の犯罪者」の概念である。ヒルバークは自著のなかでこの言葉を使っていないのだが、それが指示する内容をさまざまな形で^{せじょう}机上に載せている。〈机上の犯罪者〉の概念を主軸に据えて彼の研究を再検討することで、アイヒマンの役割をどんな形で〈行政的犯罪〉のなかに位置づけるべきかという上記の問いへの回答も得られるはずである。

〈机上の犯罪者〉とは一九六〇年代のアイヒマン裁判やアウシュヴィツツ裁判をめぐる論争のなかから登場した概念で、アイヒマンら中央官庁でユダヤ人絶滅の指示を行った官僚たちを指すものである。アーレントの〈悪の凡庸さ〉との関連性も指摘される概念だが、官僚機構内の職位と権限に依拠して命令を立案・伝達し、現場の人間に非道な犯罪を遂行させる黒幕的な存在、現代の行政機構の破壊力を解き放つ新たな犯罪者のタイプという警鐘的な意味合いも込められている。ヒルバークの次の説明は、〈机上の犯罪者〉のそうした特徴を端的に表現している。「官僚のほとんどは覚書を書き、計画を立案し、電話で相談し、会議に出席したにすぎなかった。彼らは机に向かったまま、一つの民族全体を絶滅させたのだ」。ヒルバークの著作における〈机上の犯罪者〉の類型を考察したデイルク・ローゼの論考によると、そこには次の二つの特徴が見られるという。

一つ目の特徴は、「F」である。ヒルバークによれば、絶滅政策を担った官僚たちのほとんどは中央から指示を出しただけで現場で殺戮の任務に従事しなかったが、そのことが自らの所業への内面的抵抗を軽減させる効果をもった。

「今日では、加害者は犠牲者に触れることなく、声を聞くこともなく、見ることもなく、殺害できるのである。加害者は成功を

確信し、その影響から守られていると実感できる」。遠いどこかで行われている殺戮から目を背けながら、自分に課せられた事務仕事を淡々とこなす官僚たちの姿勢は、不快な仕事を末端の現場に押しつける「下への責任転嫁」の所産と見ることができよう。

二つ目の特徴は「歯車としての役割」である。ヒルバーグはヴェーバーの官僚制概念に依拠しつつ、近代の高度に分業化・専門化された行政機構の働きにホロコーストの原因を見出す。ザッハリヒで合理的なテクノクラートの巨大組織がナチの野蛮なイデオロギーを実現可能にしたというのだが、そうした彼の説明には意思決定者から独立して機能する非人格的なマシンというニュアンスが含まれており、これは戦後の裁判で官僚たちが繰り返した弁明、上司の命令に従っただけという自己正当化の姿勢とも適合的である。自らは命令の内容に嫌悪感を抱きつつも、職務上の立場から従わざるをえなかったとするこの無力な歯車のイメージは、犯罪の意思を政治の中枢に押しつける「上への責任転嫁」によるものと言える。

こうした〈机上の犯罪者〉の概念は近年の研究によってかなりの程度まで相対化されているのだが、ヒルバーグ自身の説明に後の研究につながるような視点が提示されていることは注目されてよいだろう。第一に、彼は絶滅政策の推進者たちが中央官庁で事務仕事だけをしていたわけではなかったことを指摘している。国家保安本部のエリートたちの多くは特別行動部隊の指揮官として、東欧各地の現場で銃殺に直接従事していたし、アイヒマンも銃殺部隊を率いることはなかったものの、頻りに殺戮現場を視察して指示を出していた。こうした事実の指摘は、これら殺人エリートたちの実態の解明につながる視点を提供するものである。第二に、ヒルバーグは絶滅政策の推進者たちが犯罪への加担をはっきりと認識していたことを強調している。殺戮の分業体制が官僚たち一人ひとりの仕事を断片的・日常的なものにし、心理的抵抗や良心の呵責を麻痺させたことはたしかだが、それは彼らが全体の連関を見通せず、巨悪への加担を自覚できなかったことを意味しない。ヒルバーグが指摘するように、「彼らは最小の断片からも作戦全体の途方もない大きさに気づくことができた」のだった。

近年の研究との関連で言えば、第三に、ヒルバーグが絶滅政策を担った官僚たちのイニシアティブを強調している点も見逃せない。彼によれば、官僚たちは熱意と使命感をもって困難な課題に取り組み、問題の解決にめざましい創造性を発揮した。絶滅

の遂行過程でも官僚的なルーティンは存続したが、その過程の進行に障害が生じると、これを打破する新たな方法が開発された。「すべての段階で、彼らは指令がなくても驚くべき開拓者能力を発揮し、法的な指針がなくても調和した行動をとり、明確な指示がないときでも克服すべき課題を深く理解していた」。彼らの積極的な姿勢は、ヒトラーらナチ党指導部から期待されたことの先取りという面も含んでいた。「ときには上から明確な指図がなくても、時が来たと考えられた」。アイヒマンの役割についても、ヒルバーグは彼がユダヤ人絶滅という前代未聞の目標を実現するため、行政機構のなかにいかにして活路を見出していったのかを詳細に跡づけている。官僚たちは単に法規や命令に従っただけでなく、それらを超えた決定を行う裁量を有していたのであって、絶滅の組織者としていかにイニシアティブを発揮できるかが、彼らの権力の大きさを規定した。「絶滅プロセスは、まさにその本質において限界がなかった。権力がますます無制限なものになり、自由裁量の余地が広がり、権限が増加したのはこのためである」。

（田野大輔「机上の犯罪者」という神話」。なお文意を損なわない範囲で省略をおこなっている。）

注 ハンナ・アーレント＝政治哲学者、思想家。ドイツ系ユダヤ人であり、ナチスの迫害をのがれアメリカに亡命した。

アドルフ・アイヒマン＝ドイツの親衛隊中佐。強制収容所へのユダヤ人の大量移送に中心的な役割を果たした。

ミルグラム実験＝平凡な市民も一定の条件下では非人道的な行為を行うことを検証しようとした実験。アイヒマン実験とも言う。

ヒルバーグ＝ラウル・ヒルバーグ。オーストリア出身のユダヤ系歴史家。ナチスの迫害をのがれアメリカに亡命した。

ザッハリヒ＝即物的。

テクノクラート＝高度な専門知識によって、政策立案に参画する技術官僚のこと。

問1 傍線①～③のカタカナの部分と同じ漢字を用いるものはどれか。次の中からそれぞれ選び、その番号を解答番号 にマークせよ。

1	①	カン過	1	カン衝	2	カン波	3	カン案	4	カン守	5	落カン
2	②	ジュン守	1	ジュン法	2	ジュン報	3	ジュン職	4	ジュン環	5	批ジュン
3	③	頻パン	1	ハン侶	2	ハン路	3	ハン忙	4	ハン濫	5	ハン価
		A	に入れる故事成語として最も適当なものはどれか。次の中から選び、その番号を解答番号 <input type="text" value="4"/> に									

マークせよ。

- 1 烏有うゆうに帰する 2 琴瑟きんじつ相和する 3 周知徹底する 4 一瀉千里いつしゃを走る 5 人口かいしやに膾炙かいしやする

問3 (a)～(e)に入れる語句の組み合わせとして、最も適当なものはどれか。次の中から選び、その番号を解答番号 にマークせよ。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|----------|---|------|---|------|---|------|
| 1 | a | いわんや | b | 逆に | c | しかし | d | すなわち | e | それゆえ |
| 2 | a | ましてや | b | むしろ | c | だが | d | つまり | e | しかも |
| 3 | a | もちろん | b | それより | c | ところが | d | いわば | e | そして |
| 4 | a | さらに | b | どちらかといえば | c | ところで | d | 要するに | e | そのうえ |
| 5 | a | まして | b | むしろ | c | とはいえ | d | 例えば | e | さらに |

問4 傍線⑦「多くの人びとの反発を招いた」とあるが、それはなぜか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号にマークせよ。

- 1 アーレントは歴史上類例を見ない巨悪が、アイヒマンのような凡庸な役人によってなされたことを問題とし、そこに普遍性を見ようとしたが、アイヒマンのなした悪そのものを凡庸なものともみなしたように人びとは理解したから。
- 2 ユダヤ人問題の「最終解決」を積極的に立案・遂行した有能な官僚のアイヒマンの犯罪を、アーレントは小さな役人による凡庸な悪だと見たが、それがアイヒマンの罪を覆い隠し、免罪することにつながると人びとは理解したから。
- 3 アイヒマンは反ユダヤ主義イデオロギーにもとづくユダヤ人絶滅という前代未聞の目標を固い信念を持って遂行していった人物なのに、ごく平凡な人間がなした職務遂行上の巨悪でしかないというようにアーレントが片付けたから。
- 4 アーレントはアイヒマンの凡庸さを完全な思考欠如に見出し、事務的に巨悪が行われたことを歴史的事実としようとしたのに対して、そのことがアイヒマンを弁護し、免罪することに他ならないというように人びとは決めつけたから。
- 5 〈悪の凡庸さ〉にこめたアーレントの真意は、ごく平凡な人間が罪悪感もなく巨悪に加担することへの警鐘を鳴らすところにあつたが、アイヒマンの冷酷非情な怪物性にこそ原因を求めるべきだというように人びとは理解したから。

問5 傍線⑧「彼女の説明に対しては、ホロコースト研究者の評価は一樣に厳しい」とあるが、アーレントに批判的なホロコースト研究者のアイヒマン評として当てはまらないものはどれか。次の中から一つを選び、その番号を解答番号にマークせよ。

- 1 アイヒマンは「冷酷非情な怪物」でも、大量殺戮に快楽を覚える「倒錯したサディスト」でもなかった。
- 2 アイヒマンは上からの命令の忠実な実行者だっただけでなく、主体的に判断し創造的に実行する役人であった。
- 3 アイヒマンは殺戮の現場に赴くこともせず、机に向かったままで一つの民族を絶滅させた〈机上の犯罪者〉であった。
- 4 アイヒマンは〈行政的犯罪〉者の一人ではあるが、彼の歴史的個性、主観的意図が果たした主導的役割は重大であった。
- 5 アイヒマンは反ユダヤ主義イデオロギーの信奉者であり、絶滅政策を進めることを自らの使命と考え、それを主導した。

問6 傍線㉔「アーレントとホロコースト研究者の間の見解の対立」とあるが、具体的にはどのような「対立」だと筆者はとらえているか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号 8 にマークせよ。

1 アーレントはごく平凡な人間が職務の遂行を通じて巨大な悪に加担することを〈悪の凡庸さ〉という言葉で表現し、アイヒマンの免罪に加担したが、ホロコースト研究者たちはアイヒマンの非凡さと有能さを証明し、彼を断罪する立場で対立した。

2 アーレントは〈行政的犯罪〉という概念を打ち出すことで、アイヒマンの犯罪の普遍性を強調したが、ホロコースト研究者たちは絶滅政策におけるアイヒマンの冷酷非情性と彼を突き動かした反ユダヤ主義イデオロギーの重要性を強調して反論した。

3 アーレントはアイヒマンのような凡庸な役人が、巨大な悪の加担者になってしまう危険性をミルグラム実験で証明し、〈行政的犯罪〉の普遍性を強調したが、ホロコースト研究者はアイヒマンが発揮した創造的なイニシアティブを強調して対立した。

4 アーレントとホロコースト研究者の対立は、アイヒマンの〈行政的犯罪〉に普遍性を見る政治学の立場のアーレントと、ナチの世界観やイデオロギーを重視する歴史学研究者の方向性の違いを反映したものであって、本質的な対立だとは到底いえない。

5 アーレントは〈悪の凡庸さ〉という概念で、アイヒマンの犯罪の場合によっては特殊な人間でなくても犯しうるという普遍性を認めたのに対し、ホロコースト研究者はアイヒマン個人の主体的な役割、その特異な資質をより大きく問題視する見解に立った。

問7

B

E

に入れる語句の組み合わせとして最も適当なものどれか。次の中から選び、その番号を解答番号にマークせよ。

9

- | | | | | | | | |
|-----|-----|---|-----|---|----|---|---------|
| 1 B | 意図派 | C | 機能派 | D | 意図 | E | 一般化・普遍化 |
| 2 B | 機能派 | C | 意図派 | D | 機能 | E | 一般化・普遍化 |
| 3 B | 機能派 | C | 意図派 | D | 意図 | E | 一般化・普遍化 |
| 4 B | 意図派 | C | 機能派 | D | 機能 | E | 特殊化・分業化 |
| 5 B | 機能派 | C | 意図派 | D | 機能 | E | 特殊化・分業化 |

問8 傍線⑤「机上の犯罪者」の概念に当てはまらないものはどれか。次の中から一つ選び、その番号を解答番号にマークせよ。

10

- 1 〈机上の犯罪者〉とは、〈行政的犯罪〉の問題を解明するためにヒルバーグによって新たに提唱され、それ以降のホロコースト研究を大きく進展させる要素となった概念である。
- 2 〈机上の犯罪者〉とは、〈悪の凡庸さ〉とも関わるもので、大量殺戮が官僚機構内の権限で職務的・事務的に遂行される〈行政的犯罪〉の問題を考察する必要からも注目されてきた概念である。
- 3 〈机上の犯罪者〉とは、一九六〇年代のホロコーストの裁判をめぐる論争のなかから登場した概念で、官僚たちが自らは直接手を汚すことなく、デスクワークのみで大量殺戮を行ったとされる。
- 4 〈机上の犯罪者〉の概念の一つの特徴は、現場への関与はいついせよ、あくまで上司の命令に従っただけだとする責任の全てを政治の中枢に押しつける「上への責任転嫁」にあったといわれる。
- 5 〈机上の犯罪者〉の概念の特徴の一つは、殺戮から目を背け自らは淡々と事務作業に従事し、中央から指示を出しただけで、不快な仕事は全て現場に押しつけるという「下への責任転嫁」にあったとされる。

問9

F

に入れる表現として最も適当なものはどれか。次の中から選びその番号を解答番号

11

にマーク

せよ。

- 1 現場との乖離かいり 2 現場との連携 3 現場への委任 4 現場への不介入 5 現場からの距離

問10

傍線①「近代の高度に分業化・専門化された行政機構の働きにホロコーストの原因を見出す」とあるが、それはどうか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号

12

にマークせよ。

- 1 近代の高度に専門化された行政機構では、高級官僚たちがそれぞれ統治する各分野の役割分担が確立しているため、最終的な責任を誰もとらないという無責任体制がホロコーストを生み出す原因となったということ。
- 2 近代の高度に専門化された行政機構では、分業体制が確立しているため誰も全体を見通すことができず、ただ上からの命令を盲目的に実行するシステムができてしまい、ホロコーストを生むことになったということ。
- 3 近代の高度に専門化された行政機構では、一人ひとりの仕事が断片化・細分化されることで、官僚たちの良心の呵責を軽減させるとともに、上司の命令に従っただけだという自己正当化がホロコーストを容易にさせたということ。
- 4 近代の高度に専門化された行政機構では、殺戮の役割分担が確立しているため全体の関連を見通すことができず、そのため個々人が巨悪への加担を自覚できないまま前代未聞のホロコーストの暴走を許すこととなったということ。
- 5 近代の高度に専門化された行政機構では、分業体制が確立しており、各分野で仕事は相互に関連性を失ったまま進められるため、巨悪の自覚もないまま大量殺戮に加担していくというシステムがホロコーストを導いたということ。

問11 傍線㉠「ヒルバーグ自身の説明に後の研究につながるような視点が提示されている」とあるが、それはどういうことか。

次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号 13 にマークせよ。

1 「机に向かったまま、一つの民族全体を絶滅させた」と言われる〈机上の犯罪者〉たちの現場への具体的な関与の実態や絶滅政策全体に関わる企画・立案、および実行における主導的役割などの実態解明につながる視点が、ヒルバーグの説明の中に示されていたということ。

2 殺戮現場から遠く離れた清潔な事務所で計画を立案し、電話で指示するだけで「机に向かったまま、一つの民族全体を絶滅させた」と言われる〈机上の犯罪者〉たちのさらなる実態解明のために、決定的に重要な役割をヒルバーグの提示した視点が果たすことになったということ。

3 絶滅政策の推進者たちは〈机上の犯罪者〉ともいわれ、上からの命令に機械的に従っただけではなく、それを超えた決定を行う裁量を有していたが、責任を逃れるために殺戮現場に直接関わることを避けたという姑息こそくな実態の解明につながる視点を提示したのはヒルバーグであったということ。

4 「机に向かったまま、一つの民族全体を絶滅させた」と言われる絶滅政策を、淡々とこなした殺人エリートたちは、一方で上からの命令に深い嫌悪感を抱き、職務に葛藤する普通の人間でもあったのだという後の研究で明らかになる実態解明につながる視点をヒルバーグは先取りしていたということ。

5 〈机上の犯罪者〉とも称される国家保安本部のエリートたちは、中央官庁からの指示だけで自らはいっさい手を下さずことなく現場の人間に非道な犯罪を遂行させ、自らは上と下への責任転嫁で保身を図ったという実態の解明につながる視点が、ヒルバーグの説明のなかですでに示されていたということ。

問12

本文の内容に合致するものはどれか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号 14 にマークせよ。

1 アーレントが提起した〈悪の凡庸さ〉の概念は、それまで信じられてきた「冷酷非情な怪物」としてのアイヒマン像を一変させるとともに、条件次第ではどんな人間でもいつでもどこでもアイヒマンになり得るといふ普遍性を提示し、その後のホロコースト研究を転換する影響を与えた。

2 〈机上の犯罪者〉の特徴の一つは、「歯車としての役割」であるが、その「歯車」たちの巨大組織がナチの野蛮なイデオロギーを実現可能にするとともに、政治上層部の意思決定を超えて非人格的なマシーンとして機能することによって、次第に「前代未聞の犯罪」にいたる要因ともなった。

3 普遍性を偏重する〈悪の凡庸さ〉に対抗してヒルバークは〈机上の犯罪者〉の概念を提唱し、アイヒマンをはじめ絶滅政策の推進者たちが単なる行政執行者ではなく、全体を見渡す政策の企画者であり、現場に赴いて積極的に指示をする指揮官としての役割も果たしていたことを実証した。

4 絶滅政策を担った〈机上の犯罪者〉たちのほとんどは、現場から遠く離れた中央から指示を出すだけで自らはいっさい殺戮に関与することはなかったが、上からの命令に嫌悪感をいただきつつも従わざるをえなかったという姿には、アーレントの〈悪の凡庸さ〉とも深く通ずるものがあった。

5 ヒルバークは「彼らは机に向かったまま、一つの民族全体を絶滅させた」と〈机上の犯罪者〉を定義したが、後年の研究によって、彼らは決してただ事務作業だけに専従していたのでも、上からの命令を機械的に実行していたのでもなく、任務を主体的創造的に遂行していたことが明らかになった。

二 次の文章を読んで、問いに答えよ。

私たちはいわゆる五官を通して世界と接しており、世界のさまざまなものを知覚している。だが、私たちは果たしてこれらのものを見たり聞いたりしているのでしょうか。ここで視覚に議論を限定するならば、日本語には「見る」という他動詞のほかに「見える」という自動詞がある。「見る」が動作動詞であるのに対し、「見える」は状態性の動詞であつて、それは例えば「向こうに山が見える」といった仕方で見られる。ここにいう「見える」は自発性（視覚の機能が自ずと發揮おのされていること）を意味し、物が主語に立つ。私が物を「見る」に先立つて、私には物が自ずと「見える」のであるから、大森荘蔵が『新視覚新論』において、「見る」という動詞ではなく「見える」という動詞に即して視覚の問題に接近したことは十分な根拠があるように思われる。「聞く」と「聞こえる」との関係も「見る」と「見える」の関係に等しい。私たちが何かを聞くに先立つて、さまざまなものが私たちに聞こえているからである。

しかし、それにもかかわらず、私たちは「見える」という自発性の状態を超えて、あえて「見る」という能動性の状態に移行することがある。このとき「見る」とは、能動的にあるものへと視線を向けることを意味するであろう。とはいえ、「見る」という能動的な働きはそれに先立つ「見える」という自発的な状態にいわば取り囲まれており、そのために、「見る」という能動的な働きをそれとして捉えることには困難が伴う。

(a)、私たちの日常的知覚の特質もこうした困難をさらに増大させている。私たちは通常、広義における実践的関心に応じて、知覚を概念的にカテゴリー化しつつ世界を経験するが、日常的经验が一種の安定状態にいたるにつれて、私たちはかえつて知覚それ自体に注意を向けることがなくなり（そのために、見慣れた景色は思ひ出すことが困難となる）、A「
といった事態が生じる。私たちは多くの場合、対象を見ているつもりでいながら、実際には見ていない、(b)、私たちに
対象が見えているはずであるが、私たちはそのことに気づかない、という仕方で見えていない。→ I」

(c)、私たちはこうした日常的经验のただなかにあつて、突如としてある特異な仕方で見られる知覚に遭遇することがある。こうした知覚は日常的经验を支えている概念的枠組みなしカテゴリーの力が不十分であることを私たちに自覚させ、私

私たちはこうした知覚にウナガ^①されて改めて知覚それ自体へと、すなわち知覚の多様性、複雑性へと注意を向ける。ここに初めて美的知覚の可能性が開かれる。カッシーラーは晩年の著作『人間』において、次のように指摘している。

われわれの美的知覚は、われわれの通常の感性的知覚よりもはるかに多大な多様性を示し、はるかに複雑な次元に属する。感性的知覚においてわれわれはわれわれの環境の諸対象の一般的で恒常的な特徴を捉えるだけで満足する。美的経験は比較できないほど豊かである。それは通常の感性的経験においては気づかれることのない無限の可能性をはらんでいる。

② 私たちがカテゴリー的な枠組みを宙吊りにするとき、いやむしろ、私たちにカテゴリー的な枠組みを宙吊りにするようウナガす感性的対象に出会うとき、私たちはカテゴリー的な枠組みを逃れるような知覚の過剰としての多様性・複雑性に注意を向ける。ベンス・ナナイは、こうした注意の特徴を「対象に関して集中しつつ、性質に関して分散している」一点に求め、それを「分散的注意」と術語化している。(d)、私たちが感性的多様の次元にとどまりつつこうした知覚の過剰から一つのまとまった秩序すなわちゲシュタルトを作り出すときに、美的知覚が成立する。美的知覚はその過剰ゆえに、既存のカテゴリー的な枠組みを宙吊りにしつつ、私たちの思考を活性化することであろう。(e) < Ⅱ >

(e)、私たちがカテゴリー的な枠組みを逃れ出るような知覚の過剰としての多様性・複雑性に気づいたとしても、そして、そうした知覚から強烈な印象を受けたとしても、それは知覚である限りはいつしか消えてしまい、通常の感性的知覚に取って代わられるであろう。美的知覚を客観的世界のうちにいわば固定することはできないのであろうか。

カッシーラーはここで芸術の役割に注目しつつ、次のように続ける。「芸術家の作品において〔通常の感性的経験においては気づかれることのない〕可能性が実現される、すなわち明るみにもたらされ、一定の形象をとる。諸事物の外観の汲み尽くしたさを^③ケイ示することが芸術の特権の一つであり、芸術の最オウの魅力の一つである」。例えば、ゴッホの《ひまわり》は太陽を浴びたひまわりの花の強烈で多様な色彩を——すなわち、私たちにも見えていたはずなのに、私たちが見ることのなかった色彩の特質を——私たちに気づかせる。「われわれは、偉大な芸術家の作品において自然的現象の表面を発見する以前は、それを知らない」。私たちは、カッシーラーが引用するレオナルド・ダ・ヴィンチの言葉を用いるならば、造形作品をとおして「見

る技を知る」。ここでカッシーラーは造形芸術を例に論じているので、他の芸術ジャンルにも妥当する表現を用いるならば、私たちは芸術作品とおして「知覚する技を知る」。

一体、芸術とはいかなる営みなのか。カッシーラーはゲーテの議論を手がかりにしつつ、次のように論じる。芸術の営みは表現にあるが、「表現の過程はある一定の感性的媒体においてのみ達成される」。ここで画家を例に採ることにしよう。画家には世界がいわば一挙に見えている。この見えている世界を表現しようとする画家は、対象のある特定の場所に視線を集中させあえて能動的に見つつ、この特定の場所を線やデッサンといった媒体とおして描く。その際、描く行為はある一定の時間のうちに継起的になされるゆえに、^④描く人はいわば一挙に与えられていた視覚印象を継起的に分解するが、継起的に描かれた像は描く人の視覚の前にいわば同時にある。描くことの独自性は、それが手という（視覚とは異なる）身体器官を用いつつも、その結果が視覚世界のうちに実現され、目に見えるものとなることにある。すなわち、描く行為——それは触覚によって内から感受される——は、視覚世界を出発点としつつ、視覚世界へと回帰し、描かれたものはその都度の描かれた瞬間を超えて、視覚世界のうちに残り続ける。画家はこうした創作過程（それは試行錯誤と結びついている）をおして、「見る技を知る」にいたる、いやむしろ、「見る技を知ろう」として創作を続ける。

それでは、いかにして私たちは造形作品とおして「見る技を知る」（あるいはより一般的に述べるならば、芸術作品とおして「知覚する技を知る」）ことができるのか。その理由は、私たちもまた見える世界、あるいは知覚的世界——その多様性は私たちが美的知覚へと誘う——を前にして、不断にそれのある一定の形式のうちに表現しようとしていることにある。私たちは生まれて以来、単に見る存在、知覚する存在なのではない、私たちは常に描き、歌い、奏で、言葉を発する存在、すなわち表現する存在である。このように、私たちの知覚は能動的な表現への傾向性と不可分に結びついており、芸術家の営みとはこの傾向性を十全に發揮するところに成り立つ。つまり、私たちはいわば B であって、その意味において、いわゆる芸術家と私たちの間に本質的な差異は存在しない。

こうした洞察を示したものとして、ゲーテがシラーとの協力の下に執筆した断章「ディレクタンティズムについて」を挙げる

ことができる。「素描すること」の意義は「見ることを学ぶ」ことにある、と考えるゲーテは、次のように述べる。「人間は、何かを経験し享受しようとするならば、同時に生産的でなくてはならない」。ディレッタントという語は、一七世紀末に確立したものであり、主に芸術を楽しむ **C** を指すが、中には **D** の人もいたことであろう。ゲーテもまたイタリアでは素描を習っており、次の言葉はそうした経験に基づくはずである。「芸術作品は人間がそれを享受するよう要求するが、〔そのために〕芸術作品はさらに人間が芸術作品にさまざまな仕方でも関与することを要求する。芸術作品により緊密に関与する者こそが、芸術作品を十分に生き生きと享受する真の愛好者であろう」。芸術作品を享受することは、それ自体で存在する芸術作品を単に受容することではなく、芸術作品に関与すること、すなわち、享受者が自ら芸術作品の一部になるという仕方でも芸術作品の成立にかかわることであり、その意味において能動的活動である。へⅢへ

カントは美しいものと出会う際の私たちの心の状態を「構想力と悟性の自由な活動」と呼んでいる。構想力とは感性的な次元におけるゲシュタルト的まとまりを捉える能力のことであり、悟性とは思考能力のことである。美しいものと出会うとき、悟性は（通常の経験におけるのと同様に）構想力を規定し、知覚をカテゴリー化しようとするが、知覚の過剰ゆえに悟性によるカテゴリー化は宙吊りにされる。むしろ構想力は知覚の過剰ゆえにかえって悟性に働きかけ、一定の概念のもとに包括しえないほど「多くを思考させる」。こうして構想力と悟性は互いに触発しあい、その活動を「強める」。私たちが「美しいもののカンシヨウのもとにとどまる」のはそのためである。へⅣへ

したがって、美しいものと出会う際に私たちの注意は知覚それ自体に向かうとはいえず、美的経験は私たちの思考能力をも巻き込む。ここにいう思考能力とはきわめて広義のものであり、記憶力、想像力、あるいは意識下に沈殿した過去の経験なども含まれる。美的特質が文化的に形成されたものであればあるほど、それを美的に経験するには歴史的知識も要求され、そして訓練も不可欠となる。ちなみに、芸術的訓練を受けた人と素人では、同じ画像を見せられたときに、それを異なった仕方で見ていることが、実験的に知られている。すなわち、素人の注意は中心的なもの（例えば人物像）などに集中しがちであるが、芸術的訓練を受けた人の注意は画面全体に向かい、全体的特徴を掴つかもうとする傾向を持つという。あるいは、すぐれた批評家もまた通常は

見逃されてしまうような知覚的特質に自ら注意を向けることで、そこに一般の人の気づかないゲシュタルトを捉えるであろうし、また、私たちの注意をそうした知覚的特質へと向けることで私たちが美的経験へと誘うであろう。このことは、活発な思考能力が日常的な経験においては捨象されるような知覚的特質に着目することをおして、新たなゲシュタルトの成立に寄与しうることを意味する。美しいものは私たちの思考能力の強度を反響させることでいわばその深みを増すのであり、こうした過程のうち

にその真の姿を現す。へ V へ

「構想力と悟性の自由な活動」をその特質とする美の経験において、私たちは「受動的にして能動的」であって、受動性と能動性との間に区別を設けることはできない。私の側の能動的関与は美しいものの発現を可能にし、私はそれにいわば受動的に立ち会う。こうして、美しいものと出会うとき、私たちは改めて世界に能動的に関与し、世界とのかかわりをその内から生き直す。

(小田部胤久「美しいとはどういうことか?」。なお、文意を損なわない範囲で若干の省略をおこなっている。)

注 カツシーラー||ポーランド出身の哲学者。

ベンス・ナナイ||ハンガリー出身の哲学者。

シラー||ドイツの詩人・歴史家。

問 1 傍線①~③のカタカナの部分と同じ漢字を用いるものはどれか。次の中からそれぞれ選び、その番号を解答番号

にマークせよ。

15	①	ウナガされて	1	ソク災	2	ソク縛	3	督ソク	4	ソク壁	5	臆ソク
16	②	ケイ示	1	恩ケイ	2	ケイ発	3	地下ケイ	4	ケイ内	5	懂ケイ
17	③	最オウ	1	オウ着	2	老オウ	3	オウ盛	4	オウ打	5	オウ義

15

問2 傍線ア「それ」は何を指しているか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号 18 にマークせよ。

- 1 「見る」という能動的な働き。
- 2 「見る」という能動性の状態。
- 3 「見える」という自発性の状態。
- 4 「見る」という能動性の状態に移行すること。
- 5 「見える」という動詞に即して視覚の問題に接近すること。

問3 (a) (s) (e) に入れる語句の組み合わせとして最も適当なものはどれか。次の中から選び、その番号を解答番

号 19 にマークせよ。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|---|-----|---|------|
| 1 | a | さらに | b | あるいは | c | ところが | d | そして | e | ただし |
| 2 | a | あるいは | b | そのうえ | c | しかし | d | また | e | そして |
| 3 | a | また | b | そして | c | しかし | d | さらに | e | そのうえ |
| 4 | a | そのうえ | b | そして | c | あるいは | d | また | e | しかし |
| 5 | a | さらに | b | または | c | だが | d | つまり | e | ただし |

問4 傍線①「私たちの日常的知覚の特質もこうした困難をさらに増大させている」とあるが、それはどういうことか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号 20 にマークせよ。

1 「見る」という能動的な動きは、「見える」という自発的な状態に取り囲まれているので、私たちは二つの違いを明確に意識することが難しい。一方、知覚のほうは日常的な経験が重なってくればくるほど、見慣れた景色などを思い出すことが困難になる度合いが増すということ。

2 「見える」という状態から、「見る」という能動的な動作への移行を私たちが意識することは難しい。そのうえ、知覚は概念的カテゴリー化が積み重なって安定状態になると、その知覚を意識しなくなるために、「見る」という動作を能動的な働きとして意識することは余計に困難になるということ。

3 私たちは普段「見える」という状態から、「見る」という動作への変化を意識することなく行っている。そのうえ、精神が安定状態にあるときは、知覚を概念的にカテゴリー化するに際して、カテゴリー化そのものを特に意識しないまま行ってしまうようになることで意識化がさらに困難になるということ。

4 自発性・状態性を表す「見える」から「見る」という能動的な動きを表す語への変化には、「見える」という自発性を超えて意識して「見る」という意味がある。そのうえ、実際には自発性を超える意識の移行には困難が伴い、その困難は日常的知覚におけるカテゴリー化の場合にはさらに増大するということ。

5 私たちは通常「見える」という自発性の動詞から「見る」という能動的な動詞に移行することを、あまりにも日常的な経験であるだけに意識することは難しい。このことと同様に、知覚のカテゴリー化の経験が積み重なり日常的経験が安定状態になると知覚そのものを意識化することがさらに困難になるということ。

問5

A

に入れる表現として最も適当なものはどれか。次の中から選び、その番号を解答番号

21

にマ

クせよ。

- 1 見ざる、聞かざる
- 2 耳を信じて、目を疑う
- 3 見て視ぬふり、聞いて聴かぬふり
- 4 見たら見流し、聞いたら聞き流し
- 5 視れども見えず、聴けども聞こえず

問6

へ I へ V のいずれかに次の一文が入る。それはどこか。後の中から最も適当なものを選び、その番号を解

答番号

22

にマークせよ。

美しいものと出会うとき、私たちはその一部をなすという仕方です、それに関与している。

- 1 へ I へ
- 2 へ II へ
- 3 へ III へ
- 4 へ IV へ
- 5 へ V へ

問7 傍線㉔「カテゴリー的な枠組みを宙吊りにする」とあるが、それはどういうことか。次の中から最も適当なものを選び、

その番号を解答番号 23 にマークせよ。

- 1 私たちは通常、知覚をカテゴリー化して経験を蓄積しているが、知覚の過剰に出会うと、それまで蓄積してきた概念的枠組みを忘れるのでカテゴリー化を諦めてしまうようなことがあるということ。
- 2 私たちは通常、知覚を概念的にカテゴリー化しながら日常的な経験を積み重ねているが、経験が安定した状態になると、カテゴリー的枠組みを全く意識しなくなってしまうような状態に陥るということ。
- 3 私たちは通常、知覚を概念的にカテゴリー化して世界を認識しているが、知覚の過剰な多様性・複雑性に出会うと、これまで蓄積されたカテゴリー的枠組みをいったん留保するような状態になるということ。
- 4 私たちは通常、知覚をその種類や性質ごとにまとめて認識することで日常的経験をしているが、知覚の過剰に出会うと、これまでのカテゴリー的枠組みが全く役に立たないもののように認識するようになるということ。
- 5 私たちは通常、ものごとを知覚するときに無意識のうちにカテゴリー化しながら経験を積み重ねているが、複雑で多様な知覚に出会うと、それをどのカテゴリーに入れるのかを忘れてしまうような状態になるということ。

問 8

傍線⑤「私たちは芸術作品をとおして『知覚する技を知る』とあるが、「知覚する技を知る」ためにはどうすることが必要になるか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号 24 にマークせよ。

1 「知覚する技を知る」ためには、まず芸術家と同じように積極的に自らが芸術作品を制作するという表現者としての体験が必須になる。この芸術的体験の積み重ねが芸術家はどのようにして「知覚する技を知る」のかを私たちに教えてくれるのである。

2 「知覚する技を知る」ためには、芸術作品に出会い、構想力と思考能力の自由な活動を特質とする美的経験をすることが必要になる。この美的経験をさらに深化させるために、幅の広い意味での深い思考能力や歴史的な知識、芸術的な訓練も必要である。

3 「知覚する技を知る」ためには、芸術作品に出会い、構想力と思考能力が互いに触発し合うなかで、長時間対象作品に向き合つて新たなゲシュタルトを獲得することが必要である。この新たなゲシュタルト獲得に要する時間の長さこそが「知覚する技」の習得にとつて不可欠である。

4 芸術作品に出会うとき私たちは表現する意欲を持った存在として、受動的に見るだけでなく自分であればどのように表現するかなど能動的な思考を対置して見ることが求められる。「知覚する技を知る」ためにはこの能動的な思考能力と構想力とを互いに触発させ合うことが必要なのである。

5 「知覚する技を知る」ためには、まず芸術作品に出会い、日常経験とは全く異なる知覚的特質を経験することが必要になる。その知覚的特質は思考能力によってさらに深化させることができるので、新たなゲシュタルトに容易に到達できるようになるまで能動的に多様な知識を身につける必要がある。

問9 傍線㊦「描く人はいわば一挙に与えられていた視覚印象を継起的に分解するが、継起的に描かれた像は描く人の視覚の前

にいわば同時にある」とあるが、それはどういうことか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号

25

にマークせよ。

1 画家には世界が一挙に見えているが、実際の表現にあたっては特定の部分を連続的に分解して描き始める。しかし画家にとつては描かれた部分はあくまで一挙に見えていた世界と同時にあるものであるということ。

2 画家の創作過程は、対象のある特定の部分に視線を集中させて、断続的に分解する作業と描くという触覚的作業とを交互に断続的に行う。しかし画家にとつてそれらは同時に行っていると感じる作業であるということ。

3 画家は、視覚印象を時間をかけて部分に分解し、描くという身体的行為を触覚として感じるようになる。その触覚としての手の動きと対象全体を見るところという視覚的な行為とを同時に行いながら創作活動をしているということ。

4 画家には対象世界全体が見えているが、視覚印象を特定の部分に集中して次々と分解して描いていく。一方で視覚とは異なる身体的動きによって描かれた像は、常に画家の目の前に新たな像として次々と現れ続けるということ。

5 画家の創作過程では、視覚印象を断続的に分解して特定の部分から描いていく。しかし、画家が捉えた全体の視覚印象と画家の身体的活動によって描かれた部分とは常に統一されたものとして断続的に画家の目の前にあるということ。

問10

26 B D に入れる語句の組み合わせとして最も適当なものどれか。次の中から選び、その番号を解答番号にマークせよ。

- | | | | | | |
|-----|--------|---|-----|---|--------------------------|
| 1 B | 素人芸術家 | C | 好事家 | D | 天才肌 |
| 2 B | 市井の芸術家 | C | 趣味人 | D | 玄人筋 |
| 3 B | 疑似芸術家 | C | 文化人 | D | 才気煥発 <small>かんぱつ</small> |
| 4 B | 小さな芸術家 | C | 愛好家 | D | 玄人はだし |
| 5 B | 趣味的芸術家 | C | 詩人 | D | 玄人受け |

問11 傍線⑧「『美しいもののカンショウのもとにとどまる』とあるが、この中のカタカナの部分にどの漢字をあてるかについて

て五人の生徒がそれぞれ意見を述べている。次の中から最も適当な意見を選び、その番号を解答番号 27 にマークせよ。

1 生徒A——私は「鑑賞」だと思います。「鑑賞」は、学校行事の「芸術鑑賞」などと使われますが、「観賞」は「観賞魚」などと芸術以外の対象にするときに使われるからです。ここでの意味は「芸術作品を時間をかけてじっくりと自分なりに深く味わっている」ということを表していると思います。

2 生徒B——私は「観賞」だと思います。私が見た国語辞典に、「観賞」の意味として「美しいものを見て心を楽しませる」とありました。ここでは「美しいものを見て、感動しながらその場に立ち尽くしている」ということを表していると思います。

3 生徒C——私は「観照」だと思います。「観賞」や「鑑賞」では、「見て楽しむ」ことや「見て味わう」といった意味が強いからです。ここでの意味は「美しいものに出会ってその全体を見極めるために立ちどまっている」ということを表していると思います。

4 生徒D——私は「勸奨」だと思います。第一義的に「観」と「鑑」はどちらも「見る」という意味だけです。ここでは、単に「見る」ことを述べているわけではなく、むしろ「美しいもののもとにとどまることを積極的にすすめる」という意味が込められているのだと思います。

5 生徒E——私は「観賞」と「鑑賞」のどちらでも良いと思います。「観」の意味は「見る」、「鑑」の意味は「鏡に照らして見る」と大差はありません。この文では「カンショウ」の漢字よりも「とどまる」が重要な意味をもち、長い時間をかけて鑑賞（観賞）することに留意すべきだと思います。

問12

本文の内容に合致するものはどれか。次の中から最も適当なものを選び、その番号を解答番号 28 にマークせよ。

1 私たちは日々様々な出来事に出会ってその経験を概念的にカテゴリー化して日常生活をおくっているが、突然自らの経験から大きく外れるような事柄に出会くと、自らのカテゴリー化に不審を抱くと同時に、新たな事柄の多様性・複雑性に目を奪われ続けることになる。

2 芸術を享受しようとするものは、自らが芸術作品の一部になるという仕方で積極的に関与しなければならない。それは芸術作品が私たちに様々な方法で関わることを要求するからであり、また芸術作品は私たちがその一部になることによって完成するものだからである。

3 私たちは、知覚的世界に出会うとき、単に「感じる」だけでなく、それを言語などで表現する能動性を持った存在である。その点で芸術家も私たちと本質的に変わるところはないが、芸術家が私たちと異なるのは能動的表現への意識を十分に持つて表現を続ける点にある。

4 画家は世界が一挙に見えているけれども、その表現にあたっては対象のある特定の部分に視線を集中させて描き始める。それに対して、批評家は視線を画面全体に向かわせ、絵画の全体的特徴を把握して、一般の鑑賞者が中心的なものに視線を奪われがちになることを補正しようとする。

5 「聞く」と「聞こえる」の関係は、自動詞と他動詞、動作動詞と状態性の動詞、能動的な動作を表す動詞と自発性の状態を表す動詞の関係としてとらえられ、「聞く」という能動性を超えて「聞こえる」という自発性の状態に移行するものといえる。それは「見る」と「見える」の関係と同様である。